

# 松村通信第92号

2017年8月25日  
松村勝弘

## 私の中国への関心

**中国人留学生に話すことー和魂洋才** いま、私は JCL という中国人留学生を対象としている日本語学校の校長をしている。そこでは入学式と卒業式での挨拶、それに大学院への進路指導のようなことをしている。また、今年は6、7月に立命館大学大学院経営管理研究科で「企業分析」を担当した。受講生15名のうち10名が中国人留学生だ。彼らとは講義のあとよく昼食を共にして話した。JCL にしる立命館大学にしろ中国人留学生に次のようなことを話している。中国人が大勢(約30万人)米国に留学していることはよく知られている。もちろん日本留学の数も多い(約10万人弱)が、そして彼らのインセンティブは何か。多くが日本企業へ勤めたいという。それにしても、彼らが日本で学ぶ意義はなんだろう。私は、中国が日本に学ぶ点が多いと考えている。いまや中国の GDP は米国に次いで2位、購買力平価換算ではすでに1位だという推計もある。もちろん国民1人当たりではまだまだ低い。日本は明治維新以来西欧文化を取り入れ、今日にいたっている。その際「和魂洋才」を旨として、まさに西欧様式を日本的に取り入れて成功している。典型的なのはいわゆる「日本の経営」であろう。渋沢栄一『論語と算盤』以来100年以上にもわたって和魂洋才で西欧の経営方式を取り入れてきている。中国でも西欧式をそのまま取り入れてもうまく行かないだろう。中国でもだから「中体西用」などと言われている。しかし、西欧様式の取り入れは日本の方が進んでいるであろう。何せその経験が長い。いまの日本はその意味では西欧式と日本式のハイブリッドで長年の経験からその軋轢は少ない。中国でも軋轢なく西欧式を取り入れる際、日本の経験に学ぶべき点が多いと考えられる。まさに中国人留学生が日本で学ぶ意義はそこにあると考えている。また、そのように話している。

**私のこれまでの中国に対する関心** 私は従来から中国への関心を持ち続けてきている。若気の至りで、毛沢東に傾倒して『実践論』『矛盾論』を読んだりしたことはあったが、以後長らく中国への関心は薄かった。ただ、旧知の経済学部におられた小野進教授が「儒教資本主義」を唱道されているのは承知していた。その限りでの関心はあった。小野教授からは抜き刷りもいただいたのでその度毎に教授の論文を読む機会はあった。その限りではある段階からずっと中国への関心はあった。そんなこんなで儒教を知っておきたいという意識はあった。2007年正月ふと本屋で見かけた

呉智英『現代人の論語』(文春文庫、2006年)に目がとまり、その正月に一気に読んだ。その後も『論語』には関心を持ち続けてきた。とりわけ、安富歩『生きるための論語』(ちくま新書、2012年)などは大変面白かった。『論語』以外にも現代中国についての関心からさまざまな本を読んできた。直近では、やはり先ほどの小野教授に奨められて、矢吹普『習近平の夢ー台頭する中国と米中露三角関係』(花伝社、2017年)というのを読んだ。メディアや主流の考え方とは違った視点で中国を見ているので大変参考になった。そのすべてが正しいというわけでも無いだろうが、中国に対する偏った見方が多い中で、自らの考え方を整理するには適した本だった。今回この本などを紹介しながら、最近中国、とりわけ中国トップの習近平が何を考え、何を言っているのかを紹介し、日本の政治家やメディアがいかに偏っているかを紹介してみたい。

**南シナ海領土紛争** 最近中国が南シナ海の岩礁を「開発」しそこに滑走路をこしらえ、領土を拡張しようとしているのではないかと、言うことが問題になっているし、そう報じられてもいる。しかし、南シナ海が台湾の付属物として、戦前は日本がその領土として扱っていたことはあまり報じられていない。そして敗戦後それが中国に返還されたことなど全く報じられていない。もちろんその中国が中華民国であり、現代の台湾がそれだが、その権益を引き継いでいるのがいまの中国(中華人民共和国)である。また、岩礁の開発にはその前例がある。それが日本の沖ノ鳥島である。このあたりのことについて、上記矢吹氏の本でも触れられている。すなわち、

「2015年8月6日からマレーシアの首都クアラルンプールで開かれた東南アジア諸国連合(ASEAN)地域フォーラム(ARF)閣僚会議で、中国の王毅外相は、岸田外相に次のように発言して話題になった。

王毅は南シナ海のスプラトリー諸島での『岩礁埋め立て』を批判する岸田外相に対し、日本政府が沖ノ鳥島で進めている港湾施設整備を取り上げて反論したのだ。王毅は、岩礁埋め立てについて『合法的権利はない』などと指摘した岸田に対して『まず日本がこれまでに、どんな先例を作ったか見るべきだ』と切り返し、『日本は100億円を投じて沖ノ鳥島に人工島を造成し、その後、国連に対して沖ノ鳥島を中心に200カイリの排他的経済水域(EEZ)設定を要求したではないか。これに対して、国連の多くのメンバーは日本の主張を理解できず、受け入れていない』と批判した。

王毅は100億円という数字を出したが、実は予算概算は750億円だ。王毅が『日本は沖ノ鳥島を中心に200カイリの排他的経済水域（EEZ）設定を要求したが、国連の多くのメンバーは日本の主張を理解していない。受け入れていない』というのには、日本が2008年に国連大陸棚の限界委員会に対して、九州パラオ海嶺の排他的経済水域と大陸棚延伸を申請したものの、2012年に同委員会が出した『勧告』で、この申請が却下された事実を指す。（79頁）

「王毅は南シナ海諸島に関して、『70年前に中国はカイロ、ポツダム両宣言に基づき、日本に違法に占領された南沙、西沙両諸島を法に基づき奪い返し、主権を回復した』と訴えた。（82頁）

**アジアインフラ投資銀行（AIIB）** 中国がAIIBを設立し参加を呼びかけたのも記憶に新しい。日米はこれに参加していない。これに関わって次のようにいわれている。

アジアインフラ投資銀行（AIIB）に「2015年3月初めに主要7カ国（G7）で初めて英国が参加を表明したことによって参加メンバーが雪崩を打って膨らんだことは、決定的な出来事であった。……『英国企業にとって事業や投資の絶好の機会』となりうる組織に参加しない法はない。中国の軍事力や外交方針には疑問がないわけではないが、まずは『事業や投資の機会』を優先させたわけで、どこかの国の硬直したスタンスとは大違いである。

また2009年以来毎年休まず開かれている米中戦略・経済対話（S&ED）のチャンネルは、2016年6月に8回目を迎えた。時間をかけて着実な対話を続けてきた。なにしろ中国は米国債 Treasury bills の世界最大の買い手なのだ。人民元の支持なしには米ドルは紙屑になるほど堅い絆で結ばれている。

哀れなのは、日本だ。……」（191頁）

歳川隆雄『ニュースの真相』（2015年4月4日）によると、AIIBは『中国外交の完全勝利、間違った安倍首相は、官邸で財務省、外務省幹部を怒鳴った』という。（192頁）

「ここから浮かび上がるのは、安倍官邸の外交オンチぶりだけではなく、これに迎合するのみで、何ら積極的、建設的な役割を果たし得ない霞ヶ関特権官僚の極度の劣化ぶりだ。政治の劣化を支える官僚の劣化、両者の相乗作用が今回の大失敗の原因ではないか。」（193頁）

**「プチ毛沢東」習近平** 習近平は若いとき文化大革命のさなか、下放で農村で苦勞し、人民と苦勞をともにした経験を持つ。都市労働者ではなく、地方農民を権力の基盤とした毛沢東と似たところがある。だからこう言われている。

「16歳足らずで黄土高原に来た当時は、途方に暮れ、いろいろな迷いがあった。22歳でここを離れた時、習近平は揺るぎない人生

の目標を持った。『人民のために地道に働く』、これが彼のモットーになった。」（201頁）

習近平の演説からは「『人民に奉仕する』『大衆路線』の立場から、『腐敗現象』や『腐敗分子』を批判する習近平のスタンスを読み取ることができよう。」（208頁）

「こうして江沢民の『執政10年、院政10年』期に異常繁殖した腐敗問題を果敢に処理することによって、習近平は一挙にトップセブンの『集団指導制』の内実を習近平『個人独裁制』に転化した。

……習近平はわずか2年で、毛沢東方式を活用して、権力を一手に掌握した手腕は刮目（かつもく）に値する。毛沢東からその作風を深く学んだ太子党・習近平にしかできない芸当とみてよいと思われる。」（222-223頁）

**習近平、共産党の権力正統化と儒教** 中国では市場経済化が進んでいるので、共産党独裁、習近平独裁はいまやマルクス主義や共産主義の理論では正統化できない。そこで、中国の王朝による統治や儒教の思想が蘇ろうとしている。

「党はその支配の正当性を強化するため、中国の統治システムの伝統をも巧みに利用しようとしている。毛沢東時代には古臭い封建主義のシンボルとして酷評されていた古代の聖人、孔子をこの10年間あらためて評価し、その他の文化的書物についても入念に修復した。こうした試みが象徴しているのは、共産党政権が、過去の統一王朝の中で最も啓蒙的だった時代の正当な後継者であるかのように見せかける動きである。もはや語るべきイデオロギーも持たない状況では、歴史上の選り抜きの皇帝の統治を持ち出すことで、一党支配に、中国王朝風の栄光をかもし出すことができる。」（リチャード・マグレガー、小谷まさ代訳『中国共産党 支配者たちの秘密の世界』草思社、2011年、66頁）

この意味からも、中国の今後に注目するとともに、儒教の考え方を勉強しておく必要がある。その中心に孔子の『論語』があることは言うまでもない。儒教の中で論じられていることは、現代の日本人の心の奥にあるものを思い出させてくれる。もちろんよい面も悪い面もあるが、よい面を思い出しておくことは決して悪いことではない。『論語』をよく読めば、例の森友学園で唱和されていた教育勅語とはひと味もふた味も違う正論が語られていることを知ることができるだろう。

**HP、FBを見て下さい。又何でも意見を。**

皆様のご意見を歓迎します。HP（<http://www.ritsumeai.ac.jp/~matumura/>）もご覧下さい。フェイスブックもやっています。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（[matumura@mba.ritsumeai.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumeai.ac.jp)）。